

10月31日、今年も宗教改革記念日がやってきます。500年前の1917年、マルティン・ルターによって始まった革命によって、プロテスタント教会が誕生しました。私たちも、その時代の流れの中に生かされています。次の世代に、何を残せるのでしょうか。

### 預言者の革命の言葉

エルサレム入場を目前に控えたルカ18～19章は、いよいよ始まる革命の、鳴り響くドラマロールです。「人にはできないが神にはできる」「高ぶるものは低くされ、へりくだる者は高められる」「子どものようにならなければ神の国には入ることができない」と、価値観の大転換を迫る言葉が、津波のように、何層にもなって押し寄せます。

今朝の箇所、イエス様は「預言者の言葉は皆実現する」と言われました。革命の預言と聞けば、それは良い知らせを連想しますが、実は必ずしもそうではありません。むしろ、災いや苦難の到来を告げる恐ろしい裁きの預言が、旧約聖書には多く記されています。それが、「皆、実現する」と言われているのですから、これは単純には喜ばません。

「革命（レボリューション）」という言葉には、「解放」や「新時代の到来」といった、華やかで力強く、輝かしいイメージがありますが、一方では、どこか血なまぐさい、犠牲者たちの嘆きや怒りなど、暗い影をも私は同時に感じます。

イエス様は、エルサレムへの旅、すなわち私たちの信仰生活にも、必ず革命が起こる、と告げておられるのです。宗教改革が、聖書と恵みと義認の信仰を、激しい闘いの末に勝ちとったように、私たちも大きな嵐を通過して、新たな地平線にたどり着くのです。

### 三日目の復活

預言者たちの言葉に耳を傾けましょう。イザヤ、エレミヤ、エゼキエル、彼らが口を揃えて語っているのは徹底した人の罪に対する神の裁きです。しかし、同時に一貫して、その後訪れる、赦しと救いを約束しています。イザヤは「慰めよ、私の民を」と語り「起きよ、光を放て」と希望の輝きが照らします。エゼキエルは、干からびた骨となって荒地に散乱する民が、主の奇跡によって、再び甦り、神の息を吹きかけられた、おびただしい神の民となって立ち上がる幻を見ます。

主イエスもまた、エルサレム入場という革命の舞台上、死刑囚として十字架にかけられ、処刑されるという、まさに地獄絵図が繰り広げられました。こんな運命が待ち受けているのなら、方向転換して、ガリラヤに戻りましょう、とつい思ってしまいます。しかし、それはサタンの誘惑と同じです。神様のご計画は、私たちの思いを遥かに超えています。主イエスは、死刑囚となりましたが、やがて皇帝の冠をもふるい落とすほどの、輝かしい権威と栄光を纏った輝く姿で復活されました。私たちの想像を遥かに超えていることが起こるからこそ、主の業なのです。この革命は、私たちにも起こりうるのです。

確かに、私たちは荒波を超える力はない弱い存在です。ですが、自らの力の及ばない出来事を経験する時こそ、その能力を超えた神様が働いてくださることを知るのである。